

小説

うたかた

ゆづろ 満

「三原さん、大変なことが起きちゃった。すぐ私の事務所に来てくれない」

「一体どつしたんですか、一橋さん」

「詳しいことはこちらに来てから話しますよ。とにかく収しゅうがとんでもないことをやらかしちゃって」

「分かりました。すぐにつかえます。今日は日曜日なので道は空いていますから二十分ほどで事務所には着くと思います」

「じゃ、待っています。気をつけて」

三原一向は急いで身支度をすると車を発進させた。昨日降った雪は幸い溶け始め表道路は既に乾いていた。三

原は、青い顔をし、パサパサした髪の毛の生気のない石野収の顔を浮かべた。運回りのよくない収が、今度はどうな厄を背負ってしまったのか気掛かりでならなかった。三原は予定通り一橋京介の事務所に着いた。車を近くの駐車場に駐めると事務所に向かった。私鉄神奈川線の美ヶ原駅から徒歩五分のところに一橋の事務所はある。彼は不動産会社を営んでいる。五階建ての自社ビルのほか三棟ほどのマンション、そのほかに四店舗ほどを所有し、貸している。世の中の不景気風も一橋にはあまり関係がないようだ。そのせいか、一橋はあまり仕事に熱心ではない。どちらかというと趣味のゴルフや海外旅行中心の

生活と言つてよい。会社の運営は愛人の中原霧にほとんど任せきりである。愛人と言つても一橋は既に離婚しているし、中原も独身であるから不倫とは言えない。端から見るといい身分と言える。

二階が社長室になっている。三原はノックをした。すぐに「どうぞ」という一橋の野太い声が届いた。「遅くなってすみません」と言いながら三原は部屋に入った。ソファに掛けている一橋の大きな体の上に丸い顔がのっかっている。その丸い顔に大きな目があり、その目がさらに大きく開いている。彼の機嫌のよくないときの顔である。収はソファの左端に頭を竦め小さくな

て座っている。きつと目を伏せ、鼻をぐじゅぐじゅさせているに違いない。不利なときのいつもの彼の態度である。

「三原さん座ってください。突然呼び出して悪かったですね。とにかく僕一人じゃ良い知恵が浮かばないので三原さんに相談しようと思ひましてね」

「なあに大したことはありませんよ。ちよつど暇してたところですから。それに社長には世話になっているんですから少しでも役に立てれば嬉しいですよ。ところで収ちゃん、どつしたの」

「三原さん座ってください。突然呼び出して悪かったですね。とにかく僕一人じゃ良い知恵が浮かばないので三原さんに相談しようと思ひましてね」

「なあに大したことはありませんよ。ちよつど暇してたところですから。それに社長には世話になっているんですから少しでも役に立てれば嬉しいですよ。ところで収ちゃん、どつしたの」

「三原さん座ってください。突然呼び出して悪かったですね。とにかく僕一人じゃ良い知恵が浮かばないので三原さんに相談しようと思ひましてね」

三原は収の肩を軽くたたきながら間を置いて収の隣に座った。

「こんなくそおもしろくもない話は素面しよめんではできないです。どうですか三原さん養老の瀧でも。あそこは四時か

らやつてますから。なに、車ですか、それならうちの駐車場に駐めてくださいよ。一台空いていますから。明日取りにすればよいでしょう。ね、そうしましょう」

酒好きな一橋はいつも飲む口実を見つけているといつてよい。今回は絶好のチャンスといつてよい。三原は、

一橋から五階の一部屋を無償で借りていることもあり、一橋の申し出にはなかなか断れないところがある。その上、彼も無類の酒好きときているから、この申し出は三原にとつても渡りに船と言えた。話が決まると一橋の行動は速い。「じゃ、先に行つてますから」とい

と、一階の事務所の事務員に「出かける」と電話をし、身支度を始めた。三原も車の移動をすべく部屋を出た。収は体を硬くしたまま座り続けていた。

「とにかく乾杯しましょう。おい、収、元気を出して飲めよ」

「とにかく乾杯しましょう。おい、収、元気を出して飲めよ」

一橋の声に、収はようやく顔を上げ「はい」と小さく頷いた。

「とにかく人生は色々だ。男も色々、女も色々。その色々のたんびに沈んでいたんじゃ命がいくつあつても足りん。見ろ、三原さんなんて今までいくつ危ない橋を渡つて来たか分かんないよ。それでも無事に校長まで上り詰めて無事退職。退職後は誰もが羨む女子大の先生だ。三原さんを目標にして困難を乗り越えていくんだね。はい、カンパイ、カンパイ」

一橋は次々と料理を注文していく。卓上に料理をいっぱい並べるのが一橋のいつもの癖である。酒は焼酎だけである。それに引き替え三原は酒ならなんでもござれであった。いつものように生ビールを二杯一気に飲むと次に焼酎のお湯割り、そして日本酒と続く。収も三原と同じである。三原は酒に気が行って本題を忘れていた。一橋のいつもの癖で何事も針小棒大にして大騒ぎをする。今回もその手で大したことはないだろうと高を括っていた。

「三原さん、相談つて言うのはね、収が自爆テロをやらかそつとしたからなんです」

「えつ、自爆テロ。それはただ事ではありませんね」

まさか狂うほどに肩入れするとは思ひもしなかった。「これは飲むしかない」と思った。酒が進み、酔いが回るほどに収も一橋も元気が出てきた。

収の「自爆テロ」とは、やはり一橋特有なオーバークの表現であった。収は自営業である。廃品の回収、家屋の簡単な修理、解体などほぼなんでもござれの便利屋稼業を生業としている。一橋の会社が管理しているアパートやマンション、店舗の細々とした修理や塗装、内装などもすべて請け負っていた。彼の仕事の半分近くは一橋からの発注によるものであった。それだけに彼は一橋が頭が上がらなかつた。しかし、消費税アップ以降、仕事が減っていた。高校生と中学生の子供を抱え、何かと物入りな時期に仕事が途絶えることは、彼の家族の生活の破綻に結びつくことであった。それに彼は妻ともうまくいっておらず、家庭内別居の状態であった。仕事の後、居酒屋に飲みに行くとは帰宅せず軽トラの中で夜を明かすこともたびたびであった。昨夜も収は一橋の自宅の駐車場に車を駐め、エンジンを掛け放しにして夜を明かしたのであった。そして今日の昼頃、収は車の燃料タンクにホースを入れ、ガソリンをペットボトルに移しているところを一橋に発見されたというのである。実際のところ

三原は一橋のいつもの誇大なジョークかと思つた。

「本当なんですよ。そうだろうつ、収」

収はかすかに頷いている。

三原はこれが本当だとすると冗談では済まされないと思つた。酒を飲んでいる場合ではないだろうとも思つた。しかし、もう少し話を聞く必要がある。一橋は無責任に話を広げておもしろがるどころがあるからである。

「しかし、自爆テロと言いますとどこかに襲撃しようとしたんですか」

「そこなんですよ、三原さん。収は女に狂つちまつて炎症瓶で心中しようとしたんですよ」

「本当ですか、収ちゃん。」

「ちょっとそこは社長がオーバークで。そこまでは行きません」

「じゃどこまで行つたのですか。詳しく話してくださいよ」

「まあ、三原さん、収にもう少し飲ませて正常にしてから続きは話しましょう」

三原は収が谷本邦子に惚れているということの小耳に挟んでいた。五十過ぎの家庭崩壊寸前の男が、他に女性を求めるのは仕方がないだろうと思つていた。しかし、

る、本人は何のためにそんな行動をしたのかよく分からない状態のようであった。まだアルコール分が体から抜けていかなかったのかも知れない。しかし、お節介焼きで、気を回し過ぎのある一橋は、収が炎症瓶を作っているものと咄嗟に判断したらしい。そして、谷本が勤めている居酒屋を襲撃し、谷本と心中しようと、勝手に解積してしまつたのである。

「収、谷本さんは結婚しているんだよ。いくら収が惚れたつてそれは徒労に終わるだけだよ。第一谷本さんは収のことなんとも思つていないと思つよ。対象外よ。それを自分勝手な思い込みで無理心中を迫られたんじゃたまつたもんじゃやないよ。ここは相手の立場とか気持ちをしつかりと考えなくちゃいけないよ」

「ちよつと待つてくださいよ社長。話が飛躍しすぎですよ。彼女のことそんなに思つてなんかいませんよ。ただ、うちのグループの仲間だから彼女の勤めている居酒屋に行つていただけですよ。どうせ飲むなら知り合いがいる店の方がよいでしょう」

「そこが違うんだよ。月に一回とか通うんだつたら収の

論理も成り立つが、週に二、三回も通つとなると話は違ってくるだろう。誰が聞いたってこれはホの字と思つたらう。そのところを僕は言っているんだ」

「週に三回なんてオーバーですよ。そんなに通えるほど懐の余裕はありませんよ。社長はおおげさですよ」

二人の間の雲行きがおかしくなってきたとみた三原は一橋と収のグラスを取り寄せると焼酎を注ぎ水で割つた。「とにかくもう一度カンパイしましょ」

固い雰囲気の間を少しでも柔らげようと声を大きくした。

「先週のチャリティーコンサートは雨にもかかわらず結構参加者が多かったですよ。百五十名は入っていましたよ」

「三原さんの言うとおりですね。僕もあの冷たい雨でしよう。内心百人を割るんじゃないかと心配していましたよ」

「社長もそう思っていたんですか。僕も同じですよ。でも社長が探してきた現地報告者のアンジェラさんが良かったんじゃないの。彼女の拙い日本語で南三陸町の被災状況や復興についての話には感動しましたからね」

「収ちゃんの言うとおりだね。それと収ちゃんの開会の

挨拶は簡潔明瞭でよかったよ」

三原の話題転換が効を奏したようである。チャリティーコンサートとは、四年前、三原を中心に東日本大震災の被害者を支援しようとした立ち上げた団体である。先週の土曜日、美ヶ原駅ビルの四階文化交流センターのホールで開催したばかりである。一橋も収もその実行委員会の主要なメンバーになっている。

「魚屋の料理は良かったね。収はどうだった」

「社長、飲み放題に料理の個別注文にしてよかったですね。好きな品を食べられたし、量もちよびり余り、それを持ち帰りにできたので良かったですよ。女の人はこういうのがいいと思つんですよ」

「アンジェラのところは剛が来てしつこいんだよ、あいつ。山本さんも離れずになんだか難しい話ばかりするものだから迷惑かけちゃったと思つよ。」

一橋が言っているのはチャリティーコンサート当日の打ち上げの席上のことである。剛とは飯山剛のことである。彼は二十代半ばのころ一橋と同じアメリカ、ロサンゼルスにある大学に留学していた。一橋も同じ時期に留学し、そこで剛と知り合ったのである。山本は某一流企業の社員で、出張などでしょっちゅう海外に行っている。

二人とも英語が堪能なのである。美しい容姿のアンジェラには誰しも関心を持った。それに引き替え、英語に自信のない者たちにとっては高嶺の花である。しかし、英語に自信のある山本や剛にとってはアンジェラに近づく千載一遇の機会だったかもしれない。だが、一橋にすれば自分が探し出して講師として招いた女性を他の男が親しげに話すことは許せなかったのかもしれない。

「山本さんも剛も相手の気持ちを考えなくちゃいけないよね。剛なんかアンジェラに寄りかからんばかりの姿勢で、セクハラもどきになっちゃうよ。山本さんも聞きかじりのインド哲学の話をしちゃって、酒の席にはふさわしくないよね」

一橋の批判の矛先は収から剛と山本に向かつていった。「一橋さん、そろそろ本題に入りましょう。今日の相談というのはなんでしたっけ」

三原は、一橋の攻撃の矛先が剛や山本に向かうのを転換させようとした。

「そうそう、問題は収と谷本邦子さんのことだったね」
案の定一橋は三原の話に乗って来た。

「僕の言いたいのは仲間内で男女のもめ事があってはいけないということよ。それでなくとも収は今までずいぶ

んと女で苦労してきたらう。また問題を背負ったらどうするんだ。懐だつてそんなに余裕がないだらう。邦ちゃんだつて目一杯働いてそれでも足りないようなことを言っているだらう。悪いけどないない同士がくつついたらどうなる。昭和枯れススキならぬ平成枯れススキになるのが落ちだよ。今だつて収は邦ちゃんに相当入れ込んでいるみたいなんだから。この辺で踏みとどまらなないと引き返せないよ。無意識のうちに火炎瓶を作ろうとしたことがそれを証明しているだらう」

「私は今、一橋さんから聞いたばかりでこんなことを言うのは失礼かもしれませんが、収ちゃん、邦ちゃんとは引き返せないところまでいっているんですか」

「僕たちはそこまで深入りはしていませんよ。何回も言うようですが、社長はとにかくオーバーなんです。火炎瓶の話も電動草刈機用に用意しようとペットボトルに移し替えただけです。確か」

三原は収の「僕たち」という複数形の言い方に引っかかるものがあった。二人の関係はそれなりにあるんだらうと推測した。

「収ちゃんも家庭があるしね、邦ちゃんも同様だし。お互い不幸になるのは避けましょうよ」

「いやだなあ、一向さんまでそんな風に見ちゃって、僕ら本当になんでもありませんから」
「ところで収、仕事の方は順調なんだろう」
「ええ、なんとかこのところは。しかし、来週からの仕事はまだはつきりしていないんですよ。社長、なんとかありませんかね」

「おーっ、ちょうどおあつらえ向きの仕事の口がかかっているよ。収にはびつたし。住宅の解体だよ。壊し屋の収の本領を発揮してくれ。なに、二十五坪ぐらいの小さな木造家屋だから」三田もあれば済むだろう」

「社長、それはないでしょう。最低一週間はかかりますよ」

「そうか、一週間な。処理も含め八十万円だ。これでなんとかしろよ」

「それはちょっときついですね。せめて百万にはなりませんか。人夫も二、三人使わなければなりませんから。それに廃材になったものの搬出や処理に結構費用がかかりますので」

「分かった。その辺はまた検討して。これで収も少しは安心したろう。ガンガン飲め」

「それと社長、家屋の中には家財道具などはないんで

しようね」

「あつ、それを忘れていた。家財道具を含め家の中にある全てをこちらで処理することになっている。何しろ家主は七十過ぎの女性で、子供や兄弟もなく独り身なんだよ。うちの会社で建てた家なので、奥さんがうちに全て任せてくれるんだよ。必要なものは全部持ち出してから、残っているのは全部処理してくれって言っている。奥さんは医療サービス付きの老人ホームに既に入居しているんだ。そんな訳だから収が必要な物は勝手に持って行っていいということだよ」

「それならなお一層手間賃は上げてもらわないと。家財の処分は結構手がかかるんですよ」

「分かった、分かった。もう仕事の話はおしまい。飲む」

結局、三人がお開きをしたのは十一時近くであった。

一向も収も何とか電車を利用して帰宅できる時間帯であった。

「あれっ、山本さんじゃないですか。今お帰りですか」

「飯山さん、一体どうされたんですか。確か飯山さんは狎

江の方に住んでいましたよね」

「仕事の帰りですよ。お客さんのところからの帰りですよ。この田原駅近くに住んでいる方で、お得意さんなのです。新しいお客さんを紹介していただいた帰ります」

飯山は幼児や小学生向けの英会話の教材を販売している会社に勤務していた。販売促進課長補佐という肩書きである。主に訪問販売の統括をしており、彼自身もセールスの第一線で仕事をしてきた。小学校でも英語が必修になるという報道を受け、彼や彼の統括する班の販売数字は飛躍的に伸びてきていた。飯山は日本の大学を卒業後アメリカのロサンゼルス大学をも卒業している。そんなキャリアを持ちながらもなかなか定職には就けなかった。この間、交通整理の仕事や遺跡発掘の労務者などを経験してきた。しかし、一年前にこの英会話教材の会社に勤務してからは運が向いてきたのである。彼の実直な性格、そして本場仕込みの英語力が武器となり、販売成績を順調に伸ばしてきたのである。そして短期間で管理職の一角に食い込むことができたのである。一つの歯車が回り出すと全体の動きが順調にいくように、彼の人生も好転し始めたのである。懐に余裕ができると顔の表情も明るくなり、動きも軽快になってくる。やばったかった服装も一変し、いつもアイロンの

きたいたシャツにブランドのスーツを着るようになった。

「山本さんどうですか、もしお時間がありましたら軽くやりませんか。この間のチャリティーコンサートの反省もしたいですから」

「いや、実に良いタイミングですね。実は『道草』で澤恵理ちゃんと待ち合わせしているんですよ」

「待ち合わせ、それじゃ遠慮しなくちゃ」

「いやいや彼女とはそんなじゃないですよ。それから谷本邦子ちゃんも来ることになっていきますから。道草は邦ちゃんがバイトしているところですよ。彼女は今日は七時頃から店に入ることになっているそうなので。今行けば三十分もしないうちに彼女に会えますよ」

「道草って一串が八十円、定食が三百五十円という格安居酒屋のことですね」

「そうそう、僕らそこが溜まり場になっているんですよ」
「それじゃ僕も仲間に入れさせてもらおうかな」

「是非そうしてくださいよ。恵理ちゃんも邦ちゃんも大喜びですよ。今日のサプライズということで、内緒にして行きますよ」

「なんだかわくわくしてきましたね。楽しい金曜の夜になりそうですね」

道草は田原駅から徒歩二十分ほどの距離にある。回りにガソリンスタンドや生協、ドラッグストアなど並んではいない。しかし、二人がドアを押して中に入るともう既に三十席ほどの半分が客で埋まっていた。まだ開店して間がないのに、値段が安いだけではこれだけの客で埋まるとは思えない。きつと他に客を引きつける要素があるのだろう。

「山ちゃんお帰り。今日は金曜日なのにずいぶん早いじゃない。まさか会社から引導渡された訳じゃないよね。それにしちゃ顔色がよすぎるけどね」

「また、マスター脅かさないでくださいよ。今、会社を首になったら、文字通り一家心中もんですよ。ところで今日は友人と一緒にですよ。財布が歩いているようなくく景気の良い飯山剛さんです。通称剛ちゃん。今日はマスターの最高の腕を見せてくださいよ。剛ちゃんは元を正せばN自動車のアメリカ支店の総支配人の御曹司ですから口が肥えていますので」

「これはこれは、こんな場末のちっぽけな居酒屋にそのような貴公子においでいただくなんて光栄なことです。ゆっくりしていってください。きつと満足のいく料理を出しますから」

「実は、恵理ちゃんに会いたくて狛江から駆けつけたのよ」

「また山ちゃんは年寄りを馬鹿にするんだから。そんなことあり得ないでしょう。でも、まさか剛ちゃんに会えるとは思っていなかったから嬉しいわ」

澤恵理もチャリティーコンサート実行委員会のメンバーである。三原一向が田原小学校の校長をしていたときのPTAの役員をしていた。一向の声かけで山本や谷本邦子などと共に実行委員会のメンバーの一員に加わったのである。「ところで邦ちゃんは何時頃店に来るの」

「あれ、恵理ちゃん知らなかったの。確か七時から店に入るって聞いていたけど。マスター、邦ちゃんは何時に店に入るの」

「七時だよ。後三十分待ちな。それくらい我慢できるだろう。うちの看板娘はもてるからな」

「山ちゃん、あんた邦ちゃん目当てにこの店に来てんの。そんなこと奥さんにはれたらギロチンものでしょう。まじめな男ほど一度火がつくと始末に負えないんだから、気をつけてよ」

「僕は何もありませんよ。恵理ちゃんの誤解、誤解ですよ。本当に女の人って疑い深いんだから」

「全く、山ちゃんは話がオーバーなんだから。貴公子どころか数柑子(やぶこ)がいいところですよ。とにかく酒がおいしいと聞いたものですから、それを楽しみました。とりあえず秋田の清水があつたらお願いします。もちろん冷やです」

「いやあ、これは目が高い、それに清水をこ存じとは嬉しいですね。かく言う私は秋田の大曲の在の出なんです。高清水は私の自慢の酒です。席に着くなり高清水を注文された方は、お客さん、剛ちゃんでしたっけ、あなたが初めてです。嬉しいね。一杯目は私からのおごりです」

飯山剛には初めての店である。店の雰囲気や店主、場合によっては客と親しくなるには何度か足を運ばなければならぬのが通常である。しかし、気さくな、しかも少しばかり訛りのある店主の口調に、すっかり馴染み客のような気分になったのである。「カンパイ」の声も自ずと大きくならざるを得なかった。店の繁盛は、この店主の気さくでローカル色漂う雰囲気が大いに貢献しているのだろう。

そのカンパイの声が終わったときであった。「こんばんは」と言いながら澤恵理が店に入ってきた。

「あら、剛ちゃん、どうしたのよ」
恵理は驚きの声を上げた。

「あら、奥さんと同じにしないでよ。少なくとも私はそんなに疑い深い女ではありませんから。そうでしょう飯山剛ちゃん」

「あつ、あつ、僕は何もそんなこと知りませんよ。とにかく僕には関係のない話ですから」

「剛ちゃん、あなたもう酔っているの。なんだか混乱しているみたいよ。いつものシャープな剛ちゃんじゃないみたい。しかし、まっいいか。とにかく剛ちゃんが私に会いに来てくれたっていうことにして邦ちゃんが来るまで楽しく飲もう」

しばらくの間、座はチャリティーコンサートの話題で盛り上がった。特にアンジェラの美しさに花が咲いた。山本と飯山は打ち上げの席では、最初から最後までアンジェラのそばにいたものだから澤の冷やかしの格好的になっていた。

「山ちゃんや剛ちゃんがいくらアンジェラにアタックしたって叶わないと思うわ。彼女の容貌、美しさばかりでなく、頭脳も相当よいと思うわ。また三十代の前半と言っちゃない。それなのに大震災後二年ほどで農業法人を立ち上げ、二ヘクタールの畑を栽培しているというじゃない。また、世界中から三千万円ほどの支援金を集めているとい

うでしょう。ただもんじゃないわ」

「僕はただいろいろ話をしたくて彼女の席の隣に座っただけですよ。誤解しないでください」

「僕も山ちゃんと同じですよ。僕はアメリカに留学したことがあるので懐かしくて彼女と話をしただけです」

「山ちゃんも剛ちゃんも男だから美しい花をみるとじっとしていらなくなるのは分かるけど、あの席には他に女性が沢山いたのだからもう少し彼女たちにも気を遣ったほうがいいと思うわ。これは老婆心よ。それに一橋さんもアンジェラには関心があるみたいだから、あなたたち二人ではとても一橋さんには叶わないと思うわ。だって彼、男として魅力的だし資産家でしょう。それにしても邦ちゃん遅いわね。もう七時でしょう。」

「女の人はお化粧に時間がかかるんですよ」

「あら、剛ちゃん、邦ちゃんにずいぶん優しいのね。定刻に来た私が女じゃないみたい」

「そう意味で言った訳じゃないんですよ。ただ彼女は大学生と高校三年生の娘さんがいるでしょう。大学生の娘さんは別として、大学受験を控えている娘さんには相当気を遣っているみたいなので、夕方家を出るにはそれなりの準備があるんですよ」

「うわー剛ちゃん、ずいぶんと邦ちゃんの家の事情に詳しいのね。剛ちゃんも意外と隅に置けないのね。そういえば彼女と剛ちゃんのこと知っている。剛ちゃんずいぶんと邦ちゃんにホの字らしいの。この道草にもしょっちゅう来ているのよ」

「じゃあ邦ちゃん迷惑がっているんでしょうね」

「それが山ちゃん、それほど嫌がっているみたいじゃないのよ。私も彼女のこと心配だから聞いたのよ。剛ちゃんのことどうだって。そしたら、別にだって。お客さんだから歓迎よって」

「へーい、剛ちゃんが邦ちゃんのことを追っかけている」

「別に私は追っかけとは言っていないわ。頻繁に店に来ているといっているだけ。剛ちゃん誤解しないで」

「剛ちゃんは生活に困っているんですよ。よく頻繁に来れますね。この店がいくら安いといっても飲んで食べたら三千円はいくでしょう。おかしいね剛ちゃん」

「剛ちゃん、飲んだ後はどうしている。タクシーで藤沢の用田まで帰るといふの。タクシー代の方が飲み代よりかかるじゃないですか。その話は眉唾ね」

「山ちゃん、それが違うのよ。ここに来た時には隣の駐車

場に車を止めて、そして帰宅はしないで車の中で寝て夜を過すんですよ」

「それ絶対おかしいよ。剛ちゃんの車軽トラでしょう。その車で寝られるものですか。無理ですよ」

「山ちゃんの言うとおり。それが本当なら僕は許せないな」

「えっ、剛ちゃん、剛ちゃんを許せないって言うの。もしかして剛ちゃんも邦ちゃんにホの字なのかしら」

「そんな、それ絶対誤解です。勘弁してくださいよ、恵理ちゃん。僕は真つ白けですよ。一点の曇りもありません。大体彼女のような人が剛ちゃんみたいならすばらしい男を好きになるはずがありませんよ」

「あれあれ、そんなことを言っているの。でもなんだかますます怪しくなってきたなあ。言い方を変えると剛ちゃんのように懐が寂しくない人ならアタックokということね。そんなら剛ちゃんもその候補者であると言つことを白状しているようなものじゃない」

「恵理ちゃんには負けますね。正直言つと僕も男ですから女性に全く関心がないとは言いませんよ。邦ちゃんも人妻ですから彼女に野心などは持ちませんよ。そうですね、山ちゃん」

「剛ちゃんの言うとおり、僕らは邦ちゃんに恋心を持つなんてこれっぽちもありません。人はなぜ異性の関係を男と女の関係に持つて行こうとするんでしょうね。僕はいつもそのことが不満なんです。恵理ちゃんと僕はずいぶん長い付き合いだけど恋愛の対象としてお互い考えたことありませんか。ないでしょう。邦ちゃんのことと同じですよ。友情以上のものはありませんよ。そんなよこしまな気持ちを持つたら、邦ちゃんのダンナの耕一さんに申し訳が立ちませんよ」

「二人の気持ちはよく分かったわ。誤解していたみたいでごめんなさい。それにしても邦ちゃん遅いわね。電話しようかしら」

「その前にマスターに聞いてみたら」

「そうね、山ちゃんの言う通りね。マスター、邦ちゃん遅いけど何か連絡入っています」

「うん、少し遅れるって。そうそう、みんなに伝えてって言われていたんだ。ごめんよ」

「本命は遅れて登場か」
「剛ちゃん、そんな本命なんていう言葉を使つから誤解されるのよ。まあ、彼女が来るまでゆっくり飲んでいませう」

「夜の仕事は辞めてくれないかな。主婦が夜家を空けるのはよくないよ。子どもがいくら手を離れた年頃の大学生や高校生の娘と言っても、やはり母親を必要とする時もあるし」

邦子の夫の耕一は、出かけようと身支度をしている邦子の背中に向け、遠慮しがちに言葉をかけた。

「そんなことは私も十分に分かっているわ。だけどさくらの入学金や授業料はどうするのよ。あなたの退職金はほとんどないのよ。リストラされて三年もぶらぶらしていたでしょう。その間どれぐらい生活費などでかかったと思っっているのよ。それに再就職した会社の給料だって手取り二十万円ちょっとよ。これだけでは生活できないでしょう。まだマンションのローンも残っているし」

「だけど君の昼間の墓石屋の給料を合わせたらなんとかやっていけるじゃない」

「あなたは甘いよ。四人家族の食費がどれくらいかかるか分かりますか。また、水道光熱費も馬鹿にならないのよ。女の子は毎日シャンプーするし、エアコンだって使い放題よ。今更節約を強いたって、もって二、三日よ。身につい

に受けてのぼせ上がり道を踏み外すのが多いんだよ」

「何よ、私が道を踏み外しているっていう訳。そんな言いがかりは止めてよ。私は家族のために必死になって働いているんじゃないの。それを誰かのいい加減なタレ込みを鵜呑みにして疑いを掛けるなんて最低よ。あなたの働きがもつとあれば夜まで働かないわよ。昼間だってセールスで何時間も歩いているの。もうくたくたなのよ。家に帰れば帰つたで、あなたは何一つ家事なんてやらないじゃない。みんな私がやっているじゃないのよ。もう専業主婦の家庭ではないのよ。共稼ぎよ。共稼ぎの家庭では家事も分担しているのが当たり前なのよ。私だけが何から何まで全部背負い込むなんて不公平だよ」

「それも石野とかいう男の入れ知恵か。ちょっとぐらい収入があるからって女の権利を主張するなんてみつともないぜ。女性は女性らしくしているのが一番だよ」

「何よそれって、女は男の言うとおりに従ってればいいというの。それは女性蔑視だよ。あなたっていう人はこんなに男尊女卑の考え方の持ち主だっていうこと知らなかったわ」

「僕が差別主義者とか男尊女卑の持ち主とかの問題ではないよ。君が夜の仕事をするこの是非を問題にしているん

た習慣なんてそう簡単に直せないわよ。あなただって晩酌やたばこを止められますか。無理でしょう。同じことよ」

「だけど居酒屋で妻が働いているなんてあまり大きな声で世間には言えないよ」

「何言ってるのよ。今更格好付けてもしようがないでしょう。近所の人達はみんなあなたがリストラされたって言うことは知っているんだから。それに道草のお客は素性のはつきりしている人ばかりよ。この地域の知り合いがほとんどよ。あなたもこのことは知っているでしょう。それに、勤め始める前にこのことはあなたが言っていたことじゃない。安心だねって。今になってこんなこと言つのは男らしくないわ」

「それは確かに言ったよ。だけど最近へんな噂を聞いたし」

「何よ、変な噂って」

「石野収って言う男が君を目当てに毎日店に通っているというじゃない」

「だれがそんな根も葉もないことを言っているのよ。不愉快だよ」

「だれって名前は明かせないけど確かな情報だよ。男なんてだれでも店の女の子をチャホヤするもんだよ。それを真

だよ。話をすり替えないでくれよ」

「すり替えなんかしていないわよ。会話の過程であなたの差別的な考え方が露見したのでその問題を取り上げただけよ。何がすり替えよ。あなたの脳の理解度の問題でしょう」

「そうか、そこまで言うなら僕にも言いたいことがもつとあるよ。石野に君はお金の無心をしていないかね」

「どこでそんな話を聞いたのよ。さっきのだれかさん」

「そんなんじゃないよ。具体的にいうと百万円貸してくれらるっていうじゃないか。普通の関係でそんな大金の貸し借りなんかしますかね。おかしいよね」

「そんなことは絶対にありません。大体、収ちゃんはそんな人ではないわよ。チャリコンの単なる仲間よ。人を疑うのもほどほどにして」

「そうか、収ちゃんって呼んでいるんだ。ずいぶんと親しいじゃない」

「仲間内ではみんなそう呼び合っているのよ。それに従っただけよ。あなたってずいぶん嫉妬深いのね。嫌われるわよ、そんな男」

「そうか、君は僕のことをそんな風に思っているのか。僕だって好きこのんでリストラされた訳じゃないよ。リスト

ラされなければ十分に家族を養っていったよ。なんだよ、そんな僕の事情も理解しないで。ひどい妻だよ。本当にひどい女だ。ちゃんと書いてあったぞ。百万円はなんとか都合しますから安心して下さいって。それでもしらを切る気」

「あなた、もしかしたら私のスマホ見たの」

「ああ、見たよ」

「最低ね。見損なつたわ。夫婦の間でもしていいことと悪いことがあるわ。あなたはその一線を越えたのよ。私、悲しいわ」

その時、邦子のスマートフォンホが鳴った。澤恵理からだった。

「ねえ、あなた、定期の残高がゼロになっているんですけど分かりませんか。百万円ですよ」

妻の富佐子の切り口上に、収は虚を衝かれ、一瞬答えに窮してしまった。

「ああ、あれか。会社を設立する資本金に充てたんだよ。それに軽トラや工食用機材も必要だったんで」

収は咄嗟に答えた。会社設立は常に頭にあり、金の都合

でもないって」

収の自信に満ちた話に富佐子はなんとなく納得させられてしまった。

「そう、そんならいいけど、でも大事な虎の子のお金だから心配しちゃったのよ。大きな声を出してごめんない。お金が入ったらすぐ教えてちょうだいね。雄一にも心配させたくないから」

「なんだ雄一にまで話しちゃったのか。全く余計なことをしやがって。親父の面目丸つぶれじゃないか」

「詳しくは話してはいないわ。ただね、あなたしょっちゅう外泊しているでしょう。雄一が心配しているのよ。親父大丈夫かって。体のことじゃないわよ。分かるでしょう。そんなあなたが、今更父親の權威なんか心配するなんておかしいわよ。とにかく私はきちんとお金さえ入れてもらえば文句はありませんからね」

「俺の仕事を知ってほしいな。なにしろ勤務時間なんてないも同然だから。それに付き合いでしょっちゅう飲み会があるんだよ。そのたんびにタクシーで帰って来たら破産だよ。幸い一橋社長のアパートの一室使っていいというから、

飲んだらそこに泊まることにしているんだよ」

「何回も言わせないで、あんたがどうしようと私は関心あ

がつき次第実行に移そうとしていたことであつた。それだけになんとか辻褄を合わせることができ、収はほつとした。

「なんであたしに一言も相談なく下ろしたのよ」

「あのお金は元々おれのものだろう。相談するもしないもないよ。テメイの金をテメイで使つてどこが悪いんだ。事業を進めるのにいちいち女房に断っていたら仕事なんかできやしないよ」

収は、虚勢を張ってべらんめいな口調で応えた。

「何言つてんのよ。あれは私の働いたお金も入っているのよ。しかも、あのお金は雄一の高校入学金やそのほかの支度金のために用意していたものでしょう。一体どうする気なのよ」

「金のことなら心配するなよ。今、震災関係の大きな仕事が入つて来たんで百万や二百万はすぐ懐に入るから。富佐子も知っているだろう、お役所仕事の年度末の予算消化っていうやつを。湘南道脇の防波堤の工事が今年度中に終わることになっているんだが、大震災工事関係に職人や労働者を持つて行かれ工事が大幅に遅れているんだ。親方が僕に仕事を任すから会社を興せつて言っただ。何しろ三千万円の大仕事だ。これを仕上げたら半年は寝て暮らせるよ。あんまり細かいこと言わず任せておけよ。入学金なんて屁

りませんから。とにかくお金を家庭に入れるという最低限の父親の務めだけは果たしてよ」

久しぶりに帰つて来た部屋の中はゴミ屋敷同然であつた。小さな玄関の三和土には家族の靴が折り重なっている。狭く短い廊下には誰のものとも知れない衣服が散らばっている。部屋には食べ物やペットボトル、アルミ缶がほつたらかして、歩くと埃が舞い上がるような有様であつた。この家は妻の弟のもので、二階に弟が、一階に収家族が住んでいた。以前住んでいたマンションの家賃の滞納で追い出されて、この弟の家に逃れて来たのである。収の家族は四人である。中学三年生の次男と高校二年生の長男である。部屋は狭いながらも3LDKである。

「畜生」と怒鳴ると収は奥の四畳半の部屋のゴミを足で払いながらそこに大の字になって寝転んだ。そして、じつと天井を睨み続けていた。その天井に邦子の笑顔が浮かび上がった。収は、邦子をもつともつと確かなものにしたかった。

「ねえ、邦ちゃんどうしたのよ。もう七時半だけど今日は来ないの。山ちゃんと、それに飯山剛ちゃんも来ていて

よ。二人ともお目当てはあなたよ。早くいらっしやい」「分かった。ちょっと片付け仕事に時間を取られていたのよ。後三十分もかからないわ。マスターと二人によるしく伝えておいて」

邦子はスマートフォンをバッグにしまい込むと夫の耕一を見た。座っている耕一からすると、妻が自分を見下ろしているように思えた。

「今、電話の話聞いていたでしょう。澤恵理ちゃんが店に来ていたのよ。それに、急に休めないわ。マスターに申し訳が立たないもの。じゃ、行くわよ」

耕一は無言のままだった。しかし、明らかに不機嫌そうな顔であった。邦子はそんな夫の態度を無視してコートを持つと鉄の扉を押した。五階のコンクリートの廊下に邦子のヒールの音が響いて、段々その音が小さくなっていった。

耕一は、自分を無視するように立ち去って行った妻を憎々しく思った。しかし、その気持ちを表すことのできない自分を忌々しくも思った。ふーっ、と深いため息をついた。「どうしようか」と独りごちた。二週間ほど前のことだった。仕事帰り、慣れない力仕事で体力を消耗していた耕一は、交差点の赤信号を見落とし止まっていた前の車に追突をしてしまったのである。幸い、スピードはほとんど出て

いなく、咄嗟にブレーキを踏んだため、相手の車も自分の

車も目立った傷はなかった。ところが相手が悪かった。一見してその筋の者と分かるような男であった。だからといって居丈高に耕一を脅したわけではなかった。むしろ穏やかな言い方で耕一に話しかけてきた。有名なドイツのメーカーの車であった。「この車、分かりますね。一週間前

購入したばかりでね、一千万円したんですよ。こんな傷物はもう乗ってられませんから新車で弁償してください。いや、体の方はなんともありませんから救急車は呼ばなくていいし、警察を呼ぶのはそちらの勝手です。とにかくこちらは明後日にも会議で名古屋まで行かなくちゃなりません。二、三日中に返事をしてください。名刺を渡しておきますから」。渡された名刺の肩書きは、その社会では有名な武闘派と呼ばれる組織の幹部を表していた。名前は桜井とあった。彼は警察を呼ぼうと思った。しかし、事故の検証やなんだかんだと煩わしいことが出てくることを考えると示談で進めた方がよいと判断したのだった。しかし、一千万円という莫大な金額を聞かされ、やはり警察を呼んだ方がよかつたかなと後悔した。だが、損害賠償のことは民事問題である。警察は介入しない。さらに、耕一は任意の保険に加入していなかったのであった。余計な出費を少しでも

も削ろうとしたためである。

今の耕一には一千万円のお金など逆立ちしても出せるものではなかった。彼は桜井に会い、懇願した。彼がリストラされて生活に困窮していること、貯金などはほんの雀の涙程度であることを涙を流しながら説明した。「いくらなら出せる」と言われ、「なんとか五十万円」と答えた。「冗談でしょう」と一蹴された。

「谷本さん、私は脅迫をしているのではないんです。あなたの過失で、購入したばかりの車をあなたに傷つけられました。この車をあなたに差し上げます。その代わり同じ車を新車で返してくださいと言っているんです。どうですか。私は無理を言っていますか」

桜井の言い分には寸部の隙もなかった。しかし、耕一にも言い分がなかった訳ではなかった。一般常識では板金塗装し、査定落ちにながしかの金額を上乗せて示談するのが通例なはずである。しかし、耕一にはその点を主張する勇気が全くなかった。ただひたすらに謝るしかなかった。

ところが事態は急転直下解決に向かったのである。桜井から耕一に電話があり、百万円で妥協すると言って来たのである。耕一はその話を聞いた途端、小躍りするようになったのであった。一千万円が十分の一の百万円になったのであ

るから無理からぬことであった。しかし、これは人間の錯覚をうまく利用した巧妙な罠であったのである。桜井にしてみれば十万円そこの費用で済む修理代が百万円だったのである。修理代だって桜井の顔で下手するとただになるかも知れないのである。加害者が喜んで応じてくれることは、彼にしてみれば願ってもないことなのである。最近の社会風潮からすれば、下手にトラブルを起こせば組織にさえ波及しかねない。警察も彼らの組織つぶしを虎視眈々と狙っているからである。

しかし、耕一の喜びは糠喜びであった。電話では百万円の支払いを簡単に約束したが、現実に戻ると不可能なことはすぐに理解できた。返済期限までには後三日である。頼りにするのは妻しかなかった。耕一は妻のスマホのメールを覗いたことを幸せに思った。何とかして妻を説得する以外ないのである。返せなかった場合のことを想像すると居ても立ってもいらなくなるのである。

「ごめん遅くなって。ちょっとお化粧に時間がかったのよ。何しろ山ちゃんと剛ちゃんが来てると聞いたものだから」

「あら、なんだか私は邪魔みたいね。帰ろうかしら」
そう言っている澤恵理の目が笑っている。
「今日はマスターにお願いで半分従業員、半分客にしてもらうわ。ねえ、マスターいいでしょう。その代わりにガン飲むから」

「それでいいよ。その代わりに、最低でも日本酒一升は空けてよ」

「ようし、決まった。とにかく今日は、体も心も酒を飲んでいるのよ。みんなも私に負けないでガンガン飲んでよ。マスター、剛ちゃんと同じ高清水持ってきてよ。みんなでカンパイ」

いつも比べて邦子のハイテンションに剛、山本、恵理は内心驚いていた。きつと家でよいことでもあったのだらうと推測した。

「邦ちゃん、今日は何かよいことがあったんでしょ。何よ、教えて」

「ピンポン、剛ちゃんよく分かったわね。すごい勘さあ、飲んで。高清水を注文する客なんてそういないんだから。早く飲まないと品質が落ちちゃうし、ねえ、山ちゃんも飲んでよ。今日は奥さんのことを忘れてさ、帰りは心配しないで、うちの宿六に送らせるから。山ちゃんの奥さん、

であった。しかしながら、彼らの家は店からもの十分とないほどの距離であったから、わいわい言いながら二人で店を出て行った。剛は酔いづぶれる寸前の状態であった。新宿行きの最終電車には後三十分ほどであった。タクシーを呼ぼうとしたがいにく空車がなく、かなり時間がかかるといふ返事であった。剛のこのような状態では「心配である」、と邦子が剛を駅まで送って行くことにしたのである。

「剛ちゃんしつかりしてよ。私が駅まで送るから」

「ありがとつ、邦ちゃん。邦ちゃんのこと俺大好きだ」

そう言いながら剛は邦子の肩に手を回し、もたれかかってきた。

「剛ちゃんだめよ。誰かに見られたら事だよ」

「大丈夫、僕が責任取るから」

「何言ってるのよ。そんな無責任なことを。おばさん捕まえて冗談は止めてちょうだい」

「僕、冗談では言っていないです」

「冗談でなくてもこんなに酔っているんじゃないわよ。見てご覧なさいよ、足下はぶらついているし、手は変なところに伸びているでしょう。それに、僕と言ったり俺と言ったりと。相当酔っているわ。とにかく酔って

うちのを信用しているみたいだからさ」

「よし、僕は腹を決めた。看板まで付き合っぜ。臨時収入も入ったことだし、酒代ぐらい俺が持つから。」

そう言いながら剛は彼の太ももを邦子の太ももに密着させてきた。邦子はそれを避けるでもなくされるがままにしていた。

恵理も山本もいつになく明るい邦子に誘われるように酒量を上げ、会話も弾んでいった。

「剛ちゃん、臨時収入ってボーナスでも入ったの」

邦子は剛の耳をくすぐるようにつぶやいた

剛は体をブルツと震わせ、身をくねらせながら、

「ここだけの話だけど親の方からね」

「そう言えば剛ちゃんの実家は鎌倉だったわね。お母さん亡くなったの」

「いやそうじゃない。なんだか急にお袋が生前贈与するとか言っただけのわずかだけのお金をくれたの。内緒だよ、絶対誰にも言わないで。その代わり少しぐらいなら都合してあげてもいいよ」

「ありがとつ。この話は後でまたゆっくりしましょう」

結局この夜、山本たちは十二時近くまで飲みまくった。珍しく恵理も酔うほどに飲み、山本の歩みは心許ないほど

いないときに話しましょう」

「分かりました。酔わないでちゃんと話しましょう。でも、僕酔わないと勇気が出ませんので今言います。僕を愛人にしてください」

「また冗談を。男が愛人になりたいって、それ逆でしょう」

「いいえ、僕は邦ちゃんの愛人になりたいのです。もちろん邦ちゃんの家庭を壊すなんてことはしません。明日僕のところに来てください。きちんと話します。もちろんただとは言いません。それなりの事はさせてもらいます。母がくれた一千万円は有効に使いたいです」

邦子は、剛の一千万円という話にどきりとなり、そして思わずぐくりと唾を飲み込んだ。しかし、そのことはあくびにも出さなかった。

「剛ちゃん、やはりあなたは酔っているのよ。いきなり愛人の契約を結ぼうなんて。他人が聞いたら何を言われるかまして仲間の人たちに知られたらどんなことになるか分かるでしょう。絶交されるわよ」

「だからトップシークレットでいくんです。愛人契約っていい言葉ですね。俺、気に入りました。頼み込んだのは僕ですから、契約金は邦ちゃんの言い値で結構ですよ。契約

ですからビジネスです。気が楽でしょう。明日必ず僕のところに来てくださいよ。来なかつたら電話しますから」
 「本当に困った坊やね。明日になって目が覚めたらきつと後悔するか記憶にないかのどちらかよ。まあ、酔った勢いでしようけど私のことをそんなふうにしてくれただけでも嬉しいわ」

そういうと邦子は足を止め、剛の唇を思いつきり吸った。剛は突然のことに一瞬ひるんだが、それに応えるように剛は邦子の体を強く抱きしめた。思いの外強い力であった。足下もしっかりしていた。邦子は、剛がそれほど酔っていないと感じた。駅に着くとさすがに人気はなく、駅の明かりだけが目立っていた。剛は回りを見渡し、邦子を引き寄せ再びキスをした。邦子は素直にそれに応えた。「明日必ずね。駅に着いたら迎えに行くから」。そう言うと、札入れから一万円札を取り出すと、「これでタクシーに乗って帰って」といった。邦子は「ありがとう。気をつけてね」と言うと、投げキッスをした。彼女の顔に自然と笑みが浮かんで来た。

邦子はマンションの外廊下をできるだけ靴音を立てない

車に乗り換えた。その出費も今となって痛いのであった。邦子は減り続ける預金に次第に恐怖感を覚えてきた。ちょうどそんなとき友人から墓石販売の会社セールスの話が来た。邦子は職種を選ぶ時ではないと、その話に飛びついたのである。慣れない墓石の販売は思った以上に大変であった。訪問先は指定された所が中心であったが、自分自身が乗り気でない仕事をこなすのは苦痛が先に立った。そんな経済的な心配や仕事の心身の疲労が溜まり、夫の毎夜の要求にはとても耐えられなくなった。「仕事の疲労で体が受け付けない」とか「いびきで眠られない」などの理由を追々に並べ立て、部屋を別にするに何とか同意をもらったのである。当初は、夫がいつ部屋に闖入ひたひたして来るかと恐れて熟睡できなかったが、杞憂であった。それ以来、邦子はこの家庭内別居の安楽さを味わうようになった。
 そんな安穩な状態が突然崩れるような事態が起きた。妻に先立たれ、アパートで独り暮らしをしていた邦子の父親が突然亡くなったのである。邦子は一人っ子である。可愛がつてくれた父親の葬儀は何とか世間並みにして上げたいと思つた。父親には葬儀を出すくらいは遺産はあるだろうと思つた。父親に蓋を開けてみるとそれは五十万円にも満たなかつた。僧侶、葬儀屋、埋葬料の

ように歩き、キーをそつと鍵穴に差し込むとドアを開けた。自室に入りベッドに座り込むと酔いがどつと襲つてきた。動悸の音も耳に聞こえそうなほどであった。フーッと息を大きく吐くと、自分でも分かるほどのアルコールの臭いがした。「少し飲み過ぎたか」とつぶやくと下着になるとそのままベッドの布団に潜り込んだ。夫とは寢室を共にしなくなつてからもう二年半ほど経つ。夫が鹹首されて半年の後であった。半年経つても就職活動には熱意がなかつた。自分の能力を過信し、いつでも自分を高給で迎えに来るはずと自信たつぶりなのであった。ハローワークには失業保険の受領のためにアリバイ的に月一回通つに過ぎなかつた。日中、時間がたつぶりできたにも拘わらず家事も全く手伝わず、スポーツジムに通い詰めていた。体力をもてあましてのことか邦子の体だけは毎夜求めて来た。邦子はそのような怠惰で自信過剰の夫に次第に疎ましくなつて来た。そして、とうとう夫の体臭にも我慢ができなくなつたのであった。

また、夫の退職金一千万円も二年も経たないうちに三分の一近くの残額になつていた。長女の大学入学金や授業料、それに夫の父、それに続いての母の葬儀代等大口の出費が続いた。しかも、よせばよいのに退職に合わせ夫は車を新

総額は百五十万円にもなつた。百万は邦子が捻出しなければならなかつた。それがつい半年ほど前のことであつた。夫に相談してもラチがあく話ではなかつた。この時点で邦子たちの預金は百万円を割つていたのである。邦子はやむを得ず「サラ金」から百万円を借りたのである。これまでも利息を支払つてくるのが精一杯であつた。元金は少しも減つていながつた。このようなやむを得ない事情と、また、家庭でできるだけ夫と顔を合わせる機会を少なくする狙いもあつて近くの居酒屋でのアルバイトを始めたのであつた。居酒屋・道草のオーナーは一目で邦子を気に入つてくれた。時給も千五百円、しかも、指名や紹介客があつた場合は八パーセントのバックマージンまで申し出てくれたのである。破格といつてよかつた。

足繁く収が道草に来るようになった。収の来店をオーナーは何となくおもしろくない様子なのは邦子もすぐに分かつた。しかし、そんな雰囲気を変えるくらい才覚を邦子は持ち合わせていた。

収は時折彼の妻や家庭生活愚痴をこぼすようになった。邦子は内心「どこにでもある問題」、と思ひながら収に相槌をしていた。そのことが収の気持ちを一層邦子に向かわせたに違いない。また、収は、邦子の気持ちが自分に傾い

ていると錯覚したのかもしれない。収の道草に通う頻度が増した。

「僕がダンナだったら邦子ちゃんをこんなに働かせないなもつと大事にするけど」

「私は好きで働いているのよ。心配しないで。ところで収ちゃんこんな頻りに店に来て大丈夫なの。奥さんは心配しないの」

「あつ、それ全然大丈夫。僕、こう見えても日給三万円の技術者なのよ。へそくり預金も一千万円ありますから。それに墨付けって知っています。あつ知らない。普通そうだよね。大工でも棟梁みたいな立場になれるっていうことよ。ペイペイの大工と段違いよ。それにユニボなんかの特殊免許を持っているし、佐官から塗装まで大体のことはやれるよ」

「へえー、収ちゃんってすごいね。それにずいぶんへそくりがあるのね。うらやましいわ。うちのダンナに収ちゃんの爪の垢を煎じて飲ませて上げたいわ。能ある鷹は爪隠すって言うけど本当ね。これは収ちゃんのためにあるような格言ね。見直しちゃったわ」

「僕はいつもよれよれの服をわざと着るようにしているんですよ。そうすると、相手のことが分かるんですよ」

ほどである。そして、百万円都合してもらえればどんなに気持ちが良いかと思つた。収は、一瞬邦子の顔に驚きが見え、走り去るのを見逃さなかつた。「明日外で会つてくれないうい」。収のこの一言は、咄嗟に聞いたくく狭い隙間から邦子の視線にずばりと命中したのである。邦子はこくりと頷くしかなかつた。

明くる日の夜、邦子は居酒屋のアルバイトを休みにした。ホテルのベッドの中で、邦子は舌で収の乳首を転がしていた。そのたびに収は身をよじらせ、そして邦子の体を求めた。邦子は収の一目華奢に見える肉体の強靱さに驚いた。そして、久しぶりに彼女の体も燃え、収の求めに幾たびも応えた。邦子は、収の体の芯と彼女の肉体の密が意外と相性が合っていると思つた。卓上に置かれた百万円は、邦子の長い心の痺れを氷解させた。邦子は大胆に収の物を口に含むと背中に戻した指の爪を思いつきり立てた。「痛い」と叫んだ収に、邦子は「これは領収証の拇印よ、実印は今日持参していなから」と言つて潤んだ瞳で収を見つめた。収はその妖艶さにどきりとなつた。

収は、一橋からもらつた家屋の解体を知り合いの業者に

「分かるって」

「相手の人格ですよ。本当の人格者は外見では判断しません。ぼろ服を纏つた人間そのものを見てくれるんです。その点で、僕は邦ちゃんのこと立派な人だつて分かりました。もつという僕が本当に出会いたかつた人なんです」

「収ちゃんそんな口説き文句を言つなんて、私本気にしちゃいますよ」

「いいんです、僕も本心ですからね。ウチは家庭内別居で、お互い何しようかと干渉しないことになってますから。」

邦子は「私と同じだ」だと思つた。その瞬間それまで締めていた籠かごが外れていくのが分かつた。男としてそれほど魅力があるとは思えないけど、「夫と別れて僕と一緒になつてくれ」とか「お金を貸してくれ」などという無理なことを言いそうもないことに安堵をした。さらにうまくいけば百万円の都合ぐらいいはつけてくれそうにも思えたのである。

「邦ちゃんが昼も夜も働いているっていう事情は聞いていますよ。こんなこと言つちゃ失礼ですが、邦ちゃんのダンナさん甲斐性がないみたいですね。なあに百万ぐらいならいつだって都合して上げますよ」

邦子はぎよつとなつた。収は透視術があるのかと思つた

五十万円を下請けに出すことにした。もちろん、収もユニボを操縦して仕事には入るつもりである。「丸投げ」などしたら、一橋に「百年早い」と怒鳴られるのは目に見えているからである。そうすれば三日間で仕事は終えることができるはずである。一橋もこのことを評価して、なんとか百万円にしろもらえるのではないかと踏んだのである。

「どうせ解体費用などあつてないようなものである」。収はそう思うと久しぶりに気持ちが軽くなつて来た。ユニボのレンタル代や燃料代などはわずかである。収の懐には四十万円は入る計算である。そうすれば、その半分の金額をとりあえず定期預金の口座に入金できる。彼の妻も少しは機嫌を直してくれるだろうと踏んだのである。しかし、まだ八十万円が不足である。「仕事が順調に入つてくれば問題ないだろう」と、収は楽観的に考えることにした。収らしい対処である。

天候にも恵まれ解体の作業は予定通り進んだ。三日きつちりで終わりそうであつた。収は仕事が一段落したら邦子と会うことを約束していた。解体の作業が終了したからと言つてすぐにお金が入るわけではない。しかし、作業の終了を一橋が確認すれば、二、三十万円ぐらいいは都合してくれるはずである。収は、邦子の豊満な白い肉体を想像する

だけで体の芯が熱くなるのだった。

下請けの作業員たちが帰った後、収はユニボを使い、地ならしをした。廃材の大部分はもう既に搬出してある。更地になると意外と広く見えてくる。その西隅には廃材の一部や家具などが無造作に積まれている。それは悲しくも寂しい光景である。収はユニボを隅に運びスイッチを切つて、キーをポケットにしまうと、「よっこらしよつ」と、掛け声を掛け、運転席から降りた。そして、洋服ダンスと思われる廃材を作業靴で蹴った。散らばっている板をまとめようと思つたのである。飛んだ板の下から長さ三、四十センチほどの缶が出てきた。収は好奇心に駆られてその缶を開けた。密着している蓋はなかなか開かない。収は革の作業手袋を外し力を込めて空けた。ギョツという奇妙な音を立てて蓋は開いた。力を入れすぎたため余つた力が缶を飛ばしてしまった。飛んだ缶からドサツという音を立てて新聞紙に包まれた四角く厚い束が落ちた。収はどきりとした。回りに人の気配を確かめるように見渡した。そして、ゆっくりとその束を拾い上げると胸元に押し当て、ユニボの陰に身を隠すようにして座り込んだ。おもむろに新聞紙を開いた。収の心臓が早鐘のように鳴った。彼の目に映つたのは、銀行の帯封が付いたままの一万円札の束、三束であつた。

を襲つて来たのを感じた。

「三百万円か。まあまあだな」。そうつぶやきながら収は再びたばこに火を点けた。勢いよく煙を吐き出しながらゆっくりと首を回した。そして、「家屋にある物は全部捨ててくれ。もし、必要な物があつたらもらつていいよ」という一橋の言葉を思い起こした。「俺の物にして構わないな」と、小さくつぶやいた。「これで決まりだ。ようやく俺にも付きが回つて来たな」と両手で自分の頬をなで回した。尻が冷たくなつてきているのに気づいた。そして、やはり立ち上がると、三つの帯封を丸めるとライターで火を点けた。三枚の帯封はあつという間に燃え尽きた。収はそれを足で踏みつけ、粉々にした。そして、三百万円を慎重に攜むと、新聞紙で丁寧に包み、バッグにしまい込んだ。さらに、缶を力任せに折り畳み、廃材の一番下に押し込んだ。収は疲れがどつと襲いかかつて来たような気がした。しかし、気持ちはいつになく軽くなつてきた。自然と邦子のことに思いが行くのであつた。金に心配せず存分に邦子と会えると思つた。思つた瞬間、彼の下半身が固くなつた。収は思わず手を伸ばしその下半身を推さえた。自分の体がこんなに正直なのに収は驚いた。今すぐにでも邦子に会いたい。電話をしようかと思つた。だが、と収は思つた。慎重

収は信じられないと言つような表情で呆然となつた。そして、膝ががくがくとなり、指が小刻み震えてきた。再び辺りを慎重に見回した。誰もいないことを確かめるとゆっくりと札束の一つを取り出した。まさしく一万円札の札束であつた。収は息を大きく吸い込むとその札束から指を離し、缶をそつと足下に置いた。そして、胸のポケットからたばこを取り出し、一本取り出した。乾いた唇に再びくわえると、火を点けた。パチリというライターの音に、どきりとなつて首をすくめた。

ゆっくりと吸い込んだ紫煙が肺の隅々まで行き渡つていくような感じがした。収は思わず「うまい」と言葉を口にした。たばこのうまさと香りを肺の全細胞が味わっているような気がしたのである。クワツ、と目まいがしたようだった。一瞬の出来事だった。が、それが鎮まると収は落ち着きを取り戻した。そして、おもむろに一つの束を取り出し、ばらばらめくり、次にゆっくりと数え始めた。しかし、人差し指と親指の皮膚が滑り、うまく数えられない。乾いた唇を舌で何回か舐めて湿らせ、指に唾を付けた。新札を数えきると、きつちり百枚であつた。収はもう一度丁寧に数えた。間違いなかつた。他の束も百枚ずつであつた。数え終わると収はべたりと地面に尻を着けた。しびれが足

に行動しないと勘の鋭い一橋にはすぐ見破られるような気がしたのである。それには派手な生活を絶対しないことである。今まで通り地味に暮らすことが肝心である。「蟻の穴から堤も崩れる」のとえもあることだ。そして、邦子にもこのことは決して漏らさないようにして行かなければならないと思つた。他方で、収は自身に信用が置けなかつた。バレたらバレたでその時だ、と収は腹をくくつた。急に肩の荷が軽くなつたような気がした。自然に「明日があるさ」というメロディーが口をついてきた。ポケットに右手を入れ車のキーをまさぐつた。下半身の熱は冷めていた。西の方に目をやると日は落ちかかり、山並みが黒くなり始めていた。近くの林の中からモズの鋭い鳴き声が辺りの空気を切り裂いた。

「鳥も何か見つけたかな。明日も晴れだ」独りこちると、収は車を発進させた。